INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.68

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1992年11月5日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

MRAキャンペーンレポート

第16回MRA日本キャンペーン開催

テーマ「より良い地球社会の実現を目指して＝新しい時代に求められるアジアの役割」

○一九九二年五月九日～二十日小田原・大阪・神戸・東京・浦和

◁ゲスト▷

海外
- イギリス―デービッド・ヤング
- インド―ダリウス・フォルブス、マハルーク・フォルブス
- インドネシア―ハッサン・シャデリー
- オーストラリア―トム・ラムゼイ
- 韓国―鄭濬、康旭、金益完、金憲元
- スリランカ―ジェハン・ペレラ
- 台湾―劉仁州、陳美珍、廖淳瑩

第十六回MRA日本キャンペーン「より良い地球社会の実現を目指して＝新しい時代に求められるアジアの役割」が、イギリス、インド、インドネシア、オーストラリア、韓国、スリランカ、台湾から十三名のゲストを迎えて、去る五月九日から二十日まで、小田原を皮切りに、大阪、神戸、東京、浦和など各地で開催された。

小田原のアジアセンターで開催されたMRA小田原国際会議には、韓国、カンボジア、台湾、中国、ハンガリーなどの在日外国人を含め百余名が参加し、二日間にわたり寝食を共にしながら熱心な話し合いがなされた。特に中国からは留学生を中心に二十名近くが参加した。

住友義輝当協会会長は開会の挨拶の中で、現在の世界が「歴史的な転換が始まった大変な混乱期」にあると位置付け、そのような時期にこそより良い地球社会の実現を目指さなければならず、特にアジアの国々を主体とする海外からの参加者を歓迎したいと述べた。そしてこのアジアセンターでの二日間でできる限り多くの友人を作ってほしいと激励した。そして、「MRAの理解は人それぞれであって、これがMRAというものはなく、また、宗教でもないので、四つの基準はあるが何かをしてはいけないという制限は何もない。それぞれの立場で、共に手を携えて世界の再造を目指していこう」と呼びかけた。

日本はアジアの灯台に

次に、四十年以上にわたりMRAの専従として世界各地で活動しているデービット・ヤング氏（イギリス）は、

「今回のテーマはMRAの創始者フランク・ブックマン博士がMRAを通して為そうとしていたことそのものである。博士はMRAを始めた時、新しい考え方で行動する男女が、新

しい国造り、世界造りのために求められていると語った。第二次世界大戦が終わった時、ヨーロッパ各国は廃墟と化し、人々は憎しみで分断されていた。MRAは憎しみに閉ざされたヨーロッパの人々の心に深い変化をもたらし、それがやがてそれぞれの国の変革につながっていった」と述べ、その一例として、フランスのイレーヌ・ロー夫人がドイツ人に対する憎しみを謝罪したことが独仏和解の礎になったという話を披露した。続けて、MRAの真髄とは何か、そしてどのように実践すればよいのかということを幾つかのステップに分けて以下のように説明した。

より良い世界の実現を目指そうと呼びかける住友国際MRA日本協会会長

「多くの英国人がMRAを通じて、大英帝国が長年にわたって他国を支配してきた過程で行ってきた様々な事柄を直視させられることとなった。被植民地の指導者の多くは、流血を見ることなく独立を勝ちとることに成功したが、それは彼らが、他人、他国を変えたいのならば先ず自分や自国から変わるという考えに従ったからだ。問題はどのようにして変わるかということだ。

先ず、MRAの正直、純潔、無私、愛という四つの道義標準に照らして自分自身を正直に見つめ内面の真実の姿を見る。ロバート・バーンズという十九世紀のスコットランドの詩人は、『他人が自分をどう見ているかを自分で見ることができるように神は助けてくれる』と書いている。

MRAを実践するためのステップについて語るイギリスのヤング氏

次のステップは、私たち英国人のように自分の非を認めることを大変嫌う人間にとってはとても難しいことだが、その基準から外れた生き方をしているところがあれば、それを正すことだ。

三つ目のステップは、今後の生き方の指針となる新しい管理に自分を委ねることだ。自分の管理でも他人の管理でもなく、何が正しいかということを基準とする管理である。毎日、心の声を静かに聞くことによって、何が正しいかということが心の中に示され、あなたの変化がやがて家庭に、友人に、そして職場や地域にも広がっていくだろう。

ブックマン博士はインドの議会で、世界には全ての人の必要を満たすものはあるが、貪欲を満たすものはないと語った。その基盤に立てば、手には職が、空腹には食物が、そして空虚な心を満たす考え方が与えられるだろう。博士は、日本はアジアの灯台になれというビジョンを持っていた。勿論、日本は経済的発電所としてアジアのみならず、世界でも有

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円
(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌IMAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出合い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円（寄付扱い・年額）を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

数の働きを示している。その発電所としての日本が、より良き地球社会をもたらす輝やける先例となり得ると信じている。

英国のこれからの役目は、他国のために謙虚に尽くすことであり、アジアの役割は、旧共産主義諸国に団結の道と慈愛を示し、新しい考え方で鼓舞することだ。同様に、中東の紛争地域や飢餓に苦しむアフリカ諸国にもその道を示すことができる。そのためには先ず自分自身というものを正直に見つめることから始めなければならない」。

二十一世紀に向かって発展するアジア

次に、滝田実氏（ゼンセン同盟名誉顧問）は、

「これからアジアが中心になる時代がきっと来るだろうと考えてアジア社会問題研究所を作り、十五年間アジア問題に取り組んできた。非常に多くの書物を読んで自らを鍛えるという学び方もあるが、自分は多くのすぐれた人に出会ったことが大変ためになったと思っている。その際、相手の欠点を見るのではなく、できるだけ長所を見い出していくことが一番大切だ」と、ブックマン博士との出会いにも触れながら自らの人生観を語った。最後、アジアの今後について次のように語った。

「過去四十年間で八十七回外国を訪ね、様々な国際会議に出たり日本の色々な審議会の委員をした体験から、世界がどう変わっていったかということを、時代を四つに区切って説明したい。一九四九年にロンドンで開かれた国際自由労連（ＩＣＦＴＵ）の世界大会に全世界から集まった代表のほとんどから、戦争はもう二度とやるまいということが叫ばれた。最大の、そして再生産なき消費である戦争を、もう再びやるまいという全世界の声だった。ところが、それが十年過ぎてから変わってきた。東西対立の時代に入ってきたからだ。それからしばらく、共産主義諸国と自由主義諸国の対立の時代が続いた。

それが少し下火になった時、大国よりも小さな国の声の方が大きくなった気がする。一九五〇年代、世界的な舞台の演壇では、やはりアメリカの代表が堂々と三十分位の演説をし、イギリスの代表も制限が十分であっても三十分位演説する。アジアの声は比較的小さかった。そういう時代を越えて、先進国よりも開発途上国の声の方が大きくなってきた。

先進国の人口は世界の約四分の一だが、開発の被害者はあとの四分の三の人たちだ。『このことについて先進国側はどう考えるか。先進国側のいう開発とはこの四分の三を犠牲にして成り立っているのではないか』という声が、今年参加したカラカスの世界大会で非常に高かった。そうなれば自ずから国は絞られてくる。日本はその最たるものの一つでありアメリカもまた然り。

その次の問題は人口問題だった。一九五〇年から七五年までの間は世界の人口は年間二千二百万人ずつ増加したが、七五年以降は四千万人に増えた。そして現在五十四億になり、やがて六十億になってくる。現在、一日二十五万人以上人口が増加している。この調子で増えていったら人口と開発のバランスがうまく取れるだろうかということで、開発と人口増加をめぐって先進国と途上国との間に非常に大きな問題がでてくる。

アジアを重視するということはどういうことなのかということを考えると、世界の総人口にアジアの占める割合は五十六～七％で、世界の三分の一しかない陸地に半分以上の人が住んでいて人口増加率も比較的高い。これはアジアの一つの特殊な条件である。しかし、経済発展や開発という側面から見ると、アジアは世界で経済発展の度合いが一番高い。

ＭＲＡの精神で政治をと語る狩野参議院議員

深い洞察に溢れた滝田氏のスピーチ

経済成長率は昨年、大体実質六％位で今年もそれを引き継ぐだろう。ヨーロッパは二％は難しいかもしれない。日本は二・五％か三％だろう。とにかくアメリカやヨーロッパと比べてもアジア地域の経済の成長発展の可能性が一番高い。

地球規模でアジアを考えた場合、人が一番多く、経済発展の度合が一番高いのがアジアということになれば、二十一世紀にかけての世界ではアジアに比重がかかってくることは間違いない。

色々な国を見てきて、発展する国の条件を仮に二つに絞るとすれば、一つは教育にどれだけ真剣に取り組んでいるかということだろう。それから開発が進んでいけば当然企業が増え、産業が発展するが、労使関係は上手くいっているかどうか、対立ばかりしていないか、それとも共通の目標を持って協力しているかどうかということ。この二つが伸びる国と伸びない国の差だと考えている」

国民に信頼される政治を

次に、かつてアメリカで開かれたMRAの世界大会に青年団代表の一員として参加して以来、MRA活動に携わってきた狩野安氏（自民党参議院議員）は、今後の政治活動をMRA精神でやっていきたいと次のように決意を述べた。

「私は政治家になって一カ月しかならないほやほやの参議院議員で、昔、アメリカ・ミシガン州のマキノ島で開かれたMRAの世界大会でブックマン博士の下で色々と勉強させていただいた。今回、政治家になって一番考えていることは、その時ブックマン博士が言われた『日本はアジアの灯台になれ』という言葉を、どうやって実現させるかということだ。私も毎日、毎日、新しい人間に生まれ変わって政治を行っていかなければならない。世界の中で尊敬される日本になるよう、一生懸命MRAの精神を毎日頭の中に入れながら努力していきたい。そのためには自分自身が、政治家が、日本の国民に信頼されなければならない。皆様の助けが必要なので、これからも厳しい目で私を見守ってほしい」。

今、一番いいことをしよう

次に、新家庭教育協会理事長として、全国で「母親心理学講座」や講演等で活躍している山崎房一氏は、「リーダーには二つのタイプがある。一つは、その人に会うと偉いなあと思い知らされるタイプ。その代わり、自分がいかに惨めなダメ人間であるかということが、まるで古畳を叩いたホコリのように出てきて、その人から離れるとホッとする。

もう一つのタイプは、その人に会うと自分がものすごく偉くなったような気がしてしまう。そして離れると、とても淋しくなる。

リーダーシップとは自分から求めるものでは絶対ない。それは周りの人が人柄に対して与えて下さるものだ」と、リーダーの資質について述べた後、「今」という自作の詩を披露した。

「今」

今、一番いいことをしよう
将来に不安や心配ごとがあっても
将来がやってきたら
そのとき
一番いいことをすればいい
あのとき
『ああすればよかった』と
思うことをやめよう
あのとき
一番いいと思ってやったのだから
……

一千万ドルに値する信頼

次に、オーストラリアのMRA協会会長のトム・ラムゼイ氏（元BHP石油社）は、「正直」ということに

東南アジア通信
The South East Asia Correspondence

SEAC 東南アジアを伝える雑誌です
東南アジア通信をぜひ御一読下さい。

●東南アジアの個々の顔と●
アジアは豊饒ゆえに多様です。それぞれの国にそれぞれの顔があり、それぞれの地域にそれぞれの息づきがあります。一つ一つの顔とじっくり向かい合い、その息吹を受け止める感性が、新たな時代の橋を作るはずです。等身大の人間どうしの理解が、いまこそ求められています。時代は私たちに問いかけています。一人一人の人間に、私たちは人間としていかに共感できるでしょうか。

〒158 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
TEL(03)5706-7847 FAX (03)5706-7848

お電話、または御郵送でもけっこうです。
東南アジア通信 季刊 年4回発行
B5版 90P 定価750円
■定期購読■ 年会費 3200円
■■賛助会員■■ 年会費 5000円

ついて自らの職場での体験を次のように語った。

「BHP石油社が新油田を発見した時、原油価格の設定方式を立案しなければならなかった。最初の年は自社に研究所がなかったので、我が社の最大の顧客であったシェル石油の研究所に成分分析を依頼し、その分析結果に基づいた設定方式で原油価格が決められた。

ところが翌年設立された我が社の研究所は、シェルとは違った分析結果を出した。その分析によれば原油の価格を下げなければならないということが判明した。

どちらの分析が正しいのかをはっきりさせた上で、正直に対処しようという私の意見に賛同してくれる人たちと、利益を上げる方が大事だという人たちに意見が分かれた。

六カ月にわたる社内での討論の結果、後者の意見が勝ちそうになってきた。私は妻にこのことを相談し、役員によって書かれた従来の分析法を続けるという趣旨の文書を妻に見せた。二人で静かに心の声に耳を傾けた後、妻は『この文書は不正直だと思う』と言った。私は再び上司に会い、『やはり文書は不正直だと思う』と伝え、上司と共に重役と社長に会い、このことについて説明することになった。

上司は社長に、『もし私たちの分析が正しく、それに従ったとすれば、会社は一千万ドルの出費を覚悟しなければなりません』と報告した。

すると社長は上司に、『一千万ドルより、BHPの名声の方がはるかに大切だ』と言い、そのことを会長に報告した。

会長は、『ごまかしはいけない。正直にやるべきだ。シェル側と会って、何が正しいかという観点で話し合いなさい』と言った。話し合いの結果、やはり我が社の分析が正しいという結論に達した。

社長はさらに、『正しいやり方に直しただけでは不十分である。我が社の過失ではなかったとはいえ、これまで顧客に余分に請求していた分を払い戻すべきだ』と言った。

後にシェルの私の親友は、『一千万ドルもかかってしまったが、そのお陰で我々両社の間に信頼関係が築かれたのだから、一ドルたりとも無駄にはならなかった』と言ってくれた。

この体験から得た教訓は、正しいと信じることのために勇気をもって立ち上がる時、同じ考えを持つ人々が周りから支えてくれるということだ。国と国の関係においても同様のことが言えると思う」。

MRAとは自分の心の中にある良心

二十一世紀の中国のために役立つ人材を育てるという理念の下に運営されている埼玉国際交流語学院の理事長を務め、長年日中友好運動に携わっている榊たか子さんは、全体会議を締め括って次のように語った。

「政治、政党、組織、その全ての元になるのは『人』であり、『人』が立派になれば皆変わる。立派になるためには思い上がってはいけない。そして過ちを犯したならば、それを直さなければならない。自分の間違いを『御免なさい』と謝ることはとても勇気のいることだ。その勇気を出すことがMRAの第一歩だと思う。

よくMRAは政治だとか、経済だとか、宗教だとか色々なことを言う人がいるが、私はそうではないと思う。MRAとは自分の心の中にある良心だ。

自分は『神様の声を聞けというが神様はどこにいますか、いません』と言って神様の存在を長い間拒否してきたが、自分の心、良心が神様だということに気が付いた。その良心に恥じない行動をすることが一番大切だ。日本がアジアの灯台になりたいと思っているうちは絶対になれない。

自分の過ちを謝る勇気を持つことがMRAの第一歩と話す榊たか子氏

ビジネスの中での正直さの必要性を説いた、オーストラリアのラムゼイ氏

光を照らすのは一人の力では絶対できない。先ず、身近のアジアの国々と日本が本当の友好関係を持ち、世界と一緒になって一人ひとりが灯台を支える小石の一つになって初めてアジアの灯台になれる」。

夕食後は、恒例の「文化の夕べ」が行なわれ、台湾と中国の人たちが一緒になってコーラスを披露したり、韓国からは「アリラン」など各国のお国自慢の芸が披露された。日本からは江戸芸かっぽれ家元の豊年斉五代目桜川ぴん助さんのかっぽれや、日本舞踊家伊藤乃ぶ子さんの指導で全員参加の花笠音頭などが演じられ、拍手喝采を浴びた。

多彩な関西プログラム

小田原会議後に箱根観光を楽しんだ海外代表は、十二日に関西へ向かい、「花外楼」で行われた歓迎夕食会に臨んだ。「花外楼」は明治維新の時の大阪会議など数々の歴史的会合が開かれてきた由緒ある料亭であり、徳光憲社長からブックマン博士との思い出や、社訓にもMRAの精神を取り入れていることなどを紹介されながら、芸術品のような料理の数々を堪能した。

翌十三日は大阪市役所を表敬した。佐々木伸助役の「大阪の国際的役割」というテーマの講演を受けて、活発な質疑応答が行われた。午後、「ダイアローグ・イン・コーベ」に出席のため神戸へ向かった。「ダイアローグ・イン・コーベ」は神戸輸入促進フォーラム（田嶋克己会長）の主催で、今年は佐藤直邦宮司のご好意で、三宮を一望に見渡す北野天満神社境内の北野プラムテラスで開かれ、多彩な人々との交流を図った。第二部の懇親パーティーでは佐藤宮司夫人他による手作りの料理が振る舞われ、アットホームな雰囲気が醸し出された。

翌二十四日は奈良を訪ね、天平文化を代表する春日大社と薬師寺を見学し、産業大国日本のイメージにまた別の一面を付け加えた。

十五日は住友電気工業伊丹製作所を見学し、同社の誇るナビゲーター・システム（自動車に取り付けたモニターの地図上に、現在の走行位置が表示される）など、現代技術の発展振りを目の当たりにした。

午後は、関西経済連合会の山田稔副会長（ダイキン工業社長）をホストに開催された懇談会で関経連のメンバーと懇談し、商業都市から国際ビジネスセンターへ変貌しつつある大阪の[illegible]への認識を深めた。

真に偉大な国になるために

大阪で十六日に開かれたMRA関西集会には、五十余名が参加した。台湾MRA協会理事長の劉仁州氏は、日本への心からのメッセージとして次のように語った。

「一九八八年から二年間、オーストラリア、インド、イギリス、アメリカを旅したが、各地で日本の経済的成功に対する怖れや怒り、非難の声を聞いた。今回日本を訪ねて、親切な人々と清潔な町並みが印象に残った。鉄道や地下鉄の運行システムも優秀であり、労使関係も世界一優秀だろう。政府も尊厳を持ち思慮深く、国民の様々な生活面で大変よく責任を果たしていると感じた。

それなのになぜこのような落差が生じるのか。それはコミュニケーション不足と、他国の日本に対する妬み、偏見があるからだ。また日本政府の自国民への対処の仕方と、他国の人々への対処の仕方も違う。

一方、アジアの民衆は、第二次世界大戦で日本が彼らの国に対して行なったことを忘れていない。そのことを反省し、再びあのようなことが行われないために立ち上がれないだろうか。

他国の繁栄のためにも日本はもっと貢献をと述べる台湾の劉氏

大阪市役所佐々木助役の話に熱心に聞き入る海外ゲスト

豊かさそれ自身に問題があるのではなく、そこに我欲が加わることが問題なのだとブックマン博士は言っている。日本が、自国のみでなく、他国の繁栄にも積極的に貢献することを決心した時、真に偉大な国になるだろう」。

キャンペーン無事終了

東京に戻った一行は、十八日に東芝本社を訪問した。清水榮常任顧問は歓迎の挨拶の中で、文化交流や環境問題に取り組む「Committed to people, committed to future（人を大切にする、豊かな価値を創造する、社会に貢献する）」という経営理念を紹介し、続いて、相賀照則常務が世界各地での活動状況や東芝の労使関係などを説明した。

二十日の浦和プログラムで埼玉国際交流語学院と埼玉園芸場を訪問したのを最後に、二週間に及ぶキャンペーンは終了し、一行は帰国の途に就いた。今回のキャンペーンに協力して下さった多くの方々に厚く感謝の意を表し、このレポートの結びとしたい。

伊藤さんの指導で花笠音頭を踊る参加者

文化の夕べに花を添えた櫻川ぴん助さんのかっぽれ

第一回

「戦国の世 相馬藩の強さの秘密」

山崎房一の あなたに百点満点

やまざき・ふさいち　昭和元年山口県生まれ。青年時代、ロンドンでMRA運動に参加。現在、新家庭教育協会理事長。母親心理学訓練講座や父親講座などの活躍がテレビ、マスコミで広く取り上げられている。

私は歴史物語が好きで、斉藤道三や羽柴秀吉など夢中で読んでしまいます。

戦国時代、不思議に思うのは奥羽の大藩伊達六十二万石を相手に血で血を洗う熾烈な戦いを繰り返しても、決して屈しなかった相馬藩六万石の強さです。その強者（つわもの）どもの勇壮華麗な雄姿は『相馬野馬追い』として、今日、私たちに戦国の世を偲ばせています。

明治維新の廃藩置県で、お殿様の居城だった相馬中村馬陵城跡に、私はいつか訪れてみたいと思っていました。

その長年の願いがかなったのは六月二十八日、仙台市へ講演に行ったからです。翌二十九日は久し振りの晴天で、日中はまぶしく暑いくらい。朝八時過ぎ仙台駅から常磐線の電車に乗って相馬駅に向かいました。

相馬駅の改札口を出た左側に市の観光案内所があり、親切な森ヨシさんにお城のことなど細々と教えられました。駅前からタクシーに乗って十分もかからないうちに城門の前に着きました。石段を登って相馬神社本殿に参拝。杉の大木が今にも時代の移り変わりを語りかけてくれそうです。

宮司田代誠信先生にご挨拶して、左手の坂道を登って本丸跡へ。そこ

は広々とした丘の上ですが相馬神社社殿や能舞台もありました。かつては三層の堅固な天守閣が建ち、やぐらや長屋などが建ち並んでいたのでしょう。軍馬のいななきが聞こえてきそうです。

相馬藩の将兵がなぜ強かったか。それは代々藩主、相馬公の仁徳だったということを人々はこんな話で今日まで言い伝えています。

藩民を餓死の危機から救った相馬藩の基本方針

江戸時代・東北地方のみならず全国を三度にわたって大飢饉が襲いました。享保、天明、天保の大飢饉です。各地で沢山の餓死者が出て、目を覆うばかりの悲惨な状態でした。

山陰地方では江戸幕府直轄領の代官が独断で幕府の米蔵を開き、多くの農民を救いましたが、その代官一家、親戚、縁者、赤子まで一人残らず幕府の手によって惨殺されました。

最初の飢饉の時、相馬藩でも沢山の餓死者を出し、悲惨を極めました。そこで、この次、もし飢饉が襲った場合、藩としてはなんとしてでも餓死者は出さない。そのためにはどうすればよいか、という評定が、藩主、家老などの重臣により、ここ馬陵城の本丸に集まって行われたのです。

激論の末、餓死者番付を作ることになりました。誰から先に餓死するのか、その順番を決めたのです。

餓死者第一は藩公。藩内の誰よりも、お殿様が真っ先に飢え死にするのです。餓死者第二は首席家老。地位の高い順から先に飢え死にします。それが藩の基本方針として決定されました。

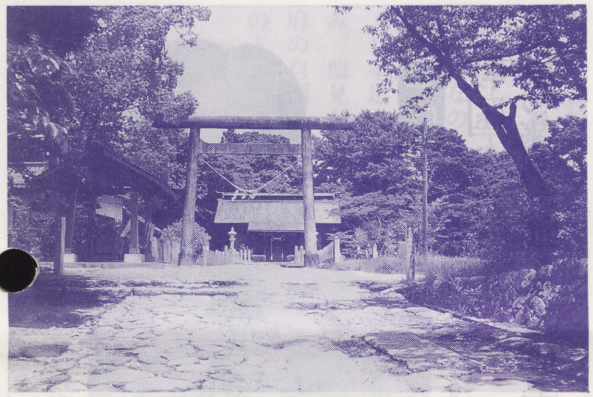
そうと決めても、実際問題として、飢饉が襲ってきた場合、藩公を死なせるわけにはいかないので、具体的にどうしたらいいかということを、みんなで必死に智恵をしぼったのです。やがて前よりも、もっとひどい大飢饉が襲ってきました。他の諸藩は前回以上の死者を出し、悲惨を極めました。だが相馬藩は、みんなが智恵をしぼった甲斐があったのです。

老人や働けない者は、寝ていて動かず一杯の粥だけで我慢する。働く者にはいくらか多く食べさせる。藩公から百姓、町人まで、地位の上下なく等しく食べ物を減らし、一致協力して助け合いました。その悲願がかなって、藩内では一人も餓死者を出さないですんだのです。

藩公初め、上に立つ人が『己の骨肉を先ず削る』という基本方針を決め、それを命がけで実行した。そのことが相馬藩民の危機を救ったのでした。

青葉の茂る緑のトンネルの坂道を下りたところに、堀が満々と水をたたえて広がっていました。自分が真っ先に餓死を受け入れるお殿様に将兵は命を惜しまなかったに違いありません。

平将門公より四十三代（「相馬六万石城下街散歩」森鎮雄先生著による）相馬恵胤先生の夫人、相馬雪香先生が『難民を助ける会』の会長として世界の難民に救いの手を差し伸べておられるのも、相馬藩の伝統が世界に向かって開花したのでしょう。



相馬中村馬陵城本丸跡

事務局近況

●今ほど日本の政治の在り方、民主主義の真価が問われているときはありません。日本という国に対する信頼という根幹が、今、大きく揺らいでいます。悪事が公然と見過ごされ、暴力団が日本の政治に深く関わっていたという殺伐とした光景に、有権者の政治に対する不信感は頂点に達しました。国民の付託に真剣に応えようとしない政治家は選挙で是非とも落選させなければなりません。しかし、そのためにも、私たち有権者一人ひとりの意識の向上が不可欠です。そこで今回、私たちの進むべき道を探るべく、日本の政治を問う月例会を三回シリーズで開催することになりました。第一回は、青年時代よりMRAとの関係が深く、国民に信頼される政治の確立を訴えている自民党参議院議員の狩野安氏（茨城）を去る十月二十日にお迎えして、「信頼される政治と国民の責任」について貴重なお話を伺いました。第二回は来る十一月二十七日に国立教育会館に元民社党参議院議員の柳沢錬造氏（国際MRA日本協会副会長）、そして第三回は、十二月十二日に全郵政会館に日本新党参議院議員でMRAの日米欧財界人コー円卓会議にも参加された寺澤芳男氏をお招きして日本の改革についてのお話を伺う予定です。どうぞ皆様、お誘い合わせの上、ご出席下さい。後程ご案内させていただきます。

●次号のIMAJニュースNo.69は、十二月末発行予定です。今夏の第46コー世界大会を特集します。ご期待下さい。